
狐と僕

水無月 玉藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐と僕

【Nコード】

N7346A

【作者名】

水無月 玉藻

【あらすじ】

奇天烈な世界に迷い込んだ『僕』さまざまなものと触れ合う中で、『僕』は徐々に、この世界へと惹かれていく。スローテンポファンタジー。

Pro・「闇夜に狐」 Side A

そこは、どこまでも続く黒い世界だった。
右を見ても左を見ても延々と続く黒、黒、黒。
生命の息遣いは、一つも聞こえてこない。
そんな完全なる漆黒の闇の中に僕は居た。

（ここは、どこ？）

地を踏みしめる感覚も無く、かといって浮かんでいる訳でも無い。
喻えるならば、宙吊りにされてもがいている。ピエロの気分だ。
いや、ピエロならばまだいい。

誰かに見られ、笑われようとそこに観客はいるんだから。

ここには笑ってくれる観客すらない。

大丈夫か？と声をかけてくれる人すらない。

存在というものは、誰かに認めてもらえなければ、意味が無い。

何かの本で読んだ台詞が頭をよぎった。

今の僕はまさに意味の無い存在と成り果てているのかもしれない。
不安になる。僕は、孤独だ。

膝を抱き、体を丸め、ぼんやりと天を仰いだ。

光はおろか、物音一つ聞こえない完全なる闇と静寂の中。
温度も無く、湿度も無い。

感じられるのは自分の両腕から伝わる微かな体温だけ。
それだけが、辛うじて僕が生きているという証明なのだ。

（怖い…。）

呟いた声ですら、すぐさま闇に喰われ消えていく。

音という存在ですら、この世界では忌み嫌われているのだらう。
物凄く傲慢な黒色だけが、この世の全てであると言わんばかりに。

目に見えず、音もしない不気味な闇が徐々に僕の体を侵食してくる。
言い知れぬ不安感、焦燥感で狂いそうだ。

いつそ狂ってしまいたい、ここから逃れられるのであれば……。

目を閉じ、耳も塞いだ。

そうすれば少しでも侵食を食い止められるかもしれない。

「死ぬのかな……」

不意に口をついて出た言葉に、僕は震えた。

死。

死とは全てを受け入れる事と似ている。

この状況を受け入れてしまえば楽になれるのかもしれない。

でも

僕は、こんな訳のわからないところで死んでいくんだ。誰に看取られる事も無いまま。

それは出来れば勘弁願いたいところだけど……。

色々な思考が交錯する。

闇は先程より、その粘度を増したようだ。

目をつぶっていても、その不愉快な感覚は増している。
全身をすっぽりと覆い尽くすのも時間の問題であらう。

気が付けば、首から下の感覚はもはや完全に消え失せていた。

闇、闇、闇。

（僕は美味しいかい？）

不意に笑いがこみ上げてくる。

悔しさと情けなさの入り混じった複雑な気持ちで、僕は泣いた。
なぜかは分からないが泣いた。

悔しい、悔しい、悔しい、悔しい。

恨みの言葉しか出てこない。

なんで僕なんだろう？どうしても僕がこんな目に合わなくちゃいけないんだろう。

体中の力が抜ける。

この闇に抗うだけの精神力は、僕には残されていなかったようだ。
このまま食われて、僕は、僕から闇へと変わる。ただ…それだけの事…。

僕はゆっくりと目を閉じた。

Pro. 「闇夜に狐」 Side B

良い風だな。

頬を撫ぜる夜気の中に、ススキの青い匂いが淡く溶け込んでいる。双子の月の光に浮かび上がる穂が、頭を垂らしながら揺れていた。それは、まるで子供をあやす母の姿を思わせる。

月は神代の昔より、豊饒のシンボルであった。

その透明な光は、神霊が宿するという信仰を生み、現代にもその風習が残っている。

十五夜。

豊饒を産んだ月に感謝し、その年に収穫した供物と共に時と空間を守るというススキを魔除けとして飾った。

農耕民族である倭国らしい土着風習だ。

月を仰ぎ尊みて、すすきを供えて魔を払う力を強大にする。

「昔の人はロマンチックだねえ」

ほうと感嘆が零れた。

眼下に広がるその景観は、大海を連想させる。

どこまでも続くススキの海、金色に輝くその姿は、美しさと共に力強さに溢れていた。

魔を払う対象として選ばれたのも頷ける。

そして、半ばススキ野原に身をうずめるように、そそりたつ丘の上。

そこに、”彼”が居た。

月を見上げてたたずむ狐が一匹、先程より楽しげに目を細めてその美しい景色にまどろんでいる。

ここは、時が流れる事を拒絶した世界。

双子の月が浮かび、その光を受け金色に輝くススキ野原が眼下に広がり、

緩やかで優しい風が穂を揺らし、サヤサヤと楽しげな歌声を運んでくる。

そんな場所。

白い細面の美しい顔立ちが、不意に険しさを帯びた。
深海を連想させる碧眼が、きゅっと細まる。

「流れが来たね」

誰に問い掛ける訳もなく呟く。その顔はどんどん厳しいものへと変わっていく。

それに呼応するように、さざ波は一つのうねりとなり、歌声は力強く天を突いた。

風もススキも、そしてこの世界の全てがこれから起こる異変を敏感に感じ取っていた。

いつもなら変わる事の無い夜、変わる事の無いいつもの風景が、
緩やかな時と共に流れていくのだが。

今宵だけは少しだけ、本当に少しだけいつもと違っていた。

針の先でつついた程のささいなほころび。

一点の曇りが徐々に広がっていくような不安感。

「無粋だねえ」

空を睨んで、狐はひゅつと眉をしかめた。

違和感の正体は、そこにもうやってきていたのだった。

Pro・「闇夜に狐」 Side B

双子の月のやや下辺り。闇に浮かぶ小さな点。

よくよく目を凝らして見れば、鈍い光を放ちながら、わずかに胎動していた。

不規則な伸縮運動を繰り返し、徐々に広がっているのである。不気味であった。

空を喰らいながら大きさを増していくその動きは原生生物を連想させる。

何か邪な、どす黒い不快感が走り、背中が粟立った。

「まったく…」

額に大きなクレバスを作り、狐が溜息をついた。

月見を邪魔されて、心底がっかりしている。

月光がそんな狐を一層力強く照らし出した。

白い面がすっかり露わとなる。

金の隈取りが目尻から耳まで真っ直ぐに伸びていた。毛色がそこだけ違うのだ。

精悍な顔だちをしている。額に浮かんだ不機嫌そうなクレバスが、碧眼と金のコントラストと相まって、一層威圧感を増している。

その口元に、銀色のキセルがちょこんと乗っていた。

時折、桜色の煙が空に立ち昇る。香草を幾種類か混ぜたものを燃しているのだ。

キセルが時折ピョコピョコと上下する度に、香りの良い煙がゆらゆらと立ち昇った。

甘い、梅の花を連想させる芳香が、大気に溶けてゆるゆると広がっていく。

「ふうふうう」

筒から、どつと煙が立ち昇る。

「やれやれだねえ」

ごそごそと腰に手をやり、狐が取り出したもの。
小さな瓢箪だ。

口元には、蓋代わりなのだろう、細い枝が刺さっている。
一見すると出来そこないの洋梨にも見える。

キュポツ。

緊張感に欠けた音が響いた。

物を掴むのに向いていない、その小さな手で器用に枝を抜き取る。
枝先に銀色の穂がついていた。

筆だ。狐の手にぴったりと合う小さな筆だ。

穂先が月の光に反射して、きらきらと輝いた。

「今日は、5周7夜に一度しか無い双子月の日だったのに…」

シララシラシララ。筆を空へ走らせる。

シララシラシララ。点に向かって真っ直ぐ。

シララシラシララ。やれやれ、やっと小さくなってきたよ。

ほんのわずかながらではあるが、点は小さくなっている。
それを満足げに確認しながら、狐は一層軽快に筆を走らせた。

シャラシャラシャラ。苦しむように、うねりを早める。

肉眼で確認できる限界まで縮んでいた。

シャラシャラシャラ。ゴトリッ。

(ゴトリッ?)

狐の耳に鈍い音が響いた。

Pro・「闇夜に狐」 Side B

無意識というものは恐ろしいな。

知覚出来ぬ”不意”の出来事というものには、気を引き締めていても、

僅かながら反応してしまうものだ。

突如、両の耳に届いた落下音に、狐の意識が点から逸れた。

一瞬の出来事であった。その隙を突いて、点は一気にうねりを早める。

「ウギユルルルイイ…ハギユルウウウ…」

硬いものを弾き合わせたような高音質の唸り声が、闇夜にこだまする。

先程まで小さく塗り潰されて消えかけていた、あの点だ。

激高している。

抑圧され、存在を消されかけた怒りがそのまま声になっている。

とめどなく吹き出る怒りの炎を抑えきれずに吼えている、そんな感じだ。

「狐、それはオラのものだああ」

腐臭に似た物凄い臭気が空に渦巻いてる。

気が付けば、黒い煙が狐の眼前でトグロを巻いていた。

熱気を孕みながら狐に恨みの言葉を吐きかける。

「それは、オラが喰らうんだああ〜おめえさんは触るなあああ」

「キヨム：自分の世界を喰らい、禍神へ墮界されてもまだ喰らう事をやめないのか？」

狐が、細く蒼い眼差しを向けたまま怒鳴った。

銀の筒が上下し、桜色の輪が空へいくつも溶けていく。

「ふんっ、それは、オラを怖がらせる…だから、喰う。おめえには関係ねえ」

狐の威圧を跳ね返さんとはかりに、黒い渦が伸縮運動を再開させる。徐々に動きを早めながら、本来在るべき姿に戻ろうとしていた。

「お前、”常世筆”を悪用しただろ？」

造り手はどんな事があっても造った世界に干渉してはいけないんだよ。

その理すら守れず、喰う事しか興味の無いけどものが…」

筆が、サラサラと宙を舞った。その動きを追うように銀の光が尾を引く。

「この私に『関係無い』…だと？」

押し殺したような狐の唸り声に、キヨムの伸縮が一瞬止まる。

「夜神風情が、偉そうな事言っな！オラは”常人神”だど！」

キヨムの姿が人の形に変貌を遂げている。

禍禍しさと不愉快さが混じった異形の者がそこにいた

背中が驚くほど曲がった小男だ。

闇色のフード付きマントを羽織り、真っ赤な口から青白い炎を吐きながら唸っている。

その姿は見る者全てに不快なものを植え付けそうだ。

「常人神だった」だろうが！痴れ者め！」

狐の顔に明らかな輕蔑の色が浮ぶ。

（救えぬ者め）

銀光がすつと下へ走り抜けた。

禁。

最後の一笔で構成された”筆霊”が、銀色に輝きながらキヨムへ放たれる。

「ウギユルイイイオオオオ！！」

キヨムの絶叫が、闇夜にこだました。

Pro. 「闇夜に狐」 Side A

夢を見ていたんだ。終わる事の無い夢を。

黒い闇に包まれながら、徐々に喰われる夢。

足元から侵食されるように飲み込まれていく夢だ。

僕は、僕では無くなり、肉体は闇へと変貌する。

もう限界だ。

首から下の感覚は完全に無い。涙で濡れて霞んでいく景色。

目頭が熱い…鼻の奥がつんと痛くなってくる。

それを拭う気力すら、無い。

何の為の涙なのかはわからない。

悔しいし、意味が分からないし、哀しい。

ただ一つ、本当にただ一つ分かっている事は“死にたくない”
” っ
て事だけ。

（諦める事と死ぬ事は似ている）

いや、本当は死ぬのはどうでもいいんだ。怖いのは意味も無く死んでいく事。

折れそうになる心に活を入れる。僕は闇をじっと睨んだ。

思考しろ。僕にはそれだけしか出来なかったじゃないか。

記憶はおぼろげで何も分からないに等しい。
それでも僕は、何かやるべき事があったはずなんだ。
その確信だけは揺るがない真実なんだから。

（成すべき事を成す必要はあるのかい？）

僕には。

「やるべき事があるんだあ！」

そう、僕には成すべき事がある。

腹に、ありつたけの力を込めて怒鳴った。

残された力を引き絞るように足掻いた。暴れた、もがいた。
首から下が、暴れる度に散り散りになり、剥がれていく。
痛みは無かった。

ちぎれていくのが分かってても、それでもやめなかった。

（成すべき事をやるには、勇気がいるんだよ）

どこかで声がした。

（無駄で終わるかもしれないんだよ？）

また違う声がした。構うもんか。

無駄ともいえるこの行為が、通用するかどうかなんて知らない。関係無い。

(諦めたら？もう充分頑張ったよ)

「うるさい、うるさい、うるさい」

黙れ！黙れ！黙れ！

それを決めるのは。

諦めを悟るのは。

「僕が思考を止めた時なんだよっ！」

絶叫した。前以上の力で抗い続けた。止めるもんか、死んでたまるか。

(諦めたらそこで積み上げた石は崩れてしまうんだからね)

これは、誰の言葉だったんだろう？もう誰でもいいや。

抗い続ける事が、今まで成して来た事への執着であったとしてもその執着に間違いは無いはずなんだ、僕がそれを諦めさえしなければ。

体は千切れて霧散し、僕は首だけの存在と成り果てる。

出来る事は全てやった。

悔しいな。

まだ何か出来るはずなんだ、思考しろ、思考しろ。

「うおおおおお」

そして、最後に僕は 闇に噛み付いたんだ。

「ウギユルイイオオオ!!」

耳障りな唸りを上げて闇が胎動する。耳を覆いたくなるが、その術をもう失っていた。

甲高い不協和音に心が折れそうになる、それでも、口を離さなかった。

噛み付いた事で、闇が絶叫しているのかどうかは分からない。でも、僕にはこれしか出来ないんだ。

絶対に離すもんか。意味も無く喰われて、意味も無く取り込まれるつてのに

なんで僕がいつまでも怯えてなきゃならないんだ。

ここは、怒る場面だろう？絶対に諦めるもんか！

死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない。

「僕は、死にたくないんだああ!」

刹那。

閃光が走った。銀色の光だ。

何者にも侵食されない神秘の光だ。

闇が不意に消えた。一面の銀世界。

首だけになった僕を、急激に引つ張る力を感じた。

温かい流れに包まれながら僕は号泣した。涙が止まらない。歓喜でもない、安堵でもない。ただ、泣いた。

意識が混濁する。僕は……堕ちる。

僕の意識は、そこで途絶えた。

温かい光に包まれて、僕が最後に覚えているのは、
金色に輝く大海と、大きな双子の月だった。

一・「同じような同じじゃない始まり」(一)

ぺたぺたり 。どこかで聞こえる奇妙な音。
ぺたぺたり 。むず痒い感覚が全身を包んでいた。
ぺたぺたり 。虫が這いずり回っているような感覚。
ぺたぺたり 。そこで僕は目覚めた。

大きな満月が夜空に浮かんでいた。

豊饒の光を浴びて、ススキ野原がサヤサヤと喜びの唄を歌う。

五週八夜 。

静かに埋もれる丘に、今宵は影が二つ。

「今宵も良い月だねえ」

口元から桜色の煙を立ち昇らせて、嬉しそうに呟く。
狐は、銀の筒をひよいと上下させながら、

「五週七夜の双子月もいいけど、八夜の満月も乙なもんだよ」

と、続けて言う嬉しそうに目を細めた。

「確かにこっちの方が見慣れてるよ」

変声期前の少年の声が、それに続いた。

そよぐ風に黒髪を躍らせ、狐の隣で同じように目を細めている。年は、十をわずかに過ぎたくらいであろうか。

一見すると、女子と見紛う華奢な体付きをしていた。

不意に風が二人の間を通り過ぎていった。

颯爽と駆け抜け、月の前で弧を描きながら走り去っていく。

「風は悪戯が好きなんだよ」

狐は、ぷかぷかとキセルをふかした。桜色の輪っかが、中空に幾つも浮かぶ。

そして、ニヤリと微笑んだ。

「確かにそうかもね」

風が弧を描いた先を見つめ、少年も柔らかく微笑んだ。

狐も小さくうんうん頷きながら、少年が見つめた先を追う。

ヒュルウィルウィー

風が一際高く吼えた。

元気になってよかったね。

そう囁いているようだった。

風はそのまま、すすき野原を颯爽と通り過ぎていく。

いたずら好きの風はこのまま、大陸の東目指して吹き進むのだろう。少年の知らない土地まで。

少年はもう一度微笑んだ。良い笑顔だ。見るものを和ませる華のような笑みだ。

柔和な顔立ちをしている。紅でも引いているように紅い唇。抜けるように白い白磁の肌をしていた。

特徴的なのは、少年もまた狐と同じ碧眼であるという事だろう。

ただ、狐の瞳は深海のように深い蒼で、彼の瞳は空のように澄み切った青。

それだけの違いだ。

「あつ……」

空を見上げていた少年が、不意に声を上げた。

「ん？」

狐は眉をひよいとしかめ、見上げる。

少年は、何か宝物を発見したような、そんな無邪気な微笑みを浮かべていた。

どうやら何かに気が付いたらしい。

「この世界には欠けた月というのは無いの？」

「あるよ、この世にも色んな月はあるんだ」

嬉しそうに問いかける少年に、狐はのんびりとした声で答える。
彼もまた心の底から月が好きなのだろう。

「一番好きなのは、三週三夜の月かな？三日月だ。
黒の中に黄色い曲線が浮かぶのもなかなか一興だねえ」

「後、四月満週の半月も美しいなあ。

あの日だけは月の周りにビロードの帯がかかるのだよ」

答えを待たずに、狐は延々と語り続ける。

少年は小さく苦笑した。

「・同じような同じじゃない始まり」(二)

銀閃をまともに喰らい、吹き飛んだキヨムは
めらめらと青い炎を吐き出し呻いた。

「きつねえー、覚えてるがいいだあ」

禍禍しい臭気を吐き散らし、ずっと裏返るように闇に溶けて、そして消える。

「ふう、やれやれ」

ぶかりと煙を吐き出して、狐は小さく嘆息した。

(割とこれも疲れるんだよ、老体には)

苦笑いを浮かべ月を見上げる。いい月だ。

五周七夜に一度の月。

双子月は白い月。この光の中では、死者も仮初めの生を受けると言われていた。

昔から世界のあちこちに月の光に関する不思議な伝承が残っているのも

一重に月の光が美しいせいだろうと、狐は思う。

全てのものが美しく、また生き生きと輝きを増していくのだ。

豊饒の加護は未来永劫変わる事は無いだろう。

風がゆるゆるとそよぎ始めた。キヨムが運んできた臭気が徐々にその濃度を下げていく。そよぐ風に身を任せ、ススキ野原も久々に訪れた優しい時間を満喫していた。

変わる事の無い夜、変わる事の無いいつもの風景がまた、緩やかな時と共に流れていく。

「うつつ……」

不意の出来事だった。狐の耳がぴくりと動く。呻き声だ。本当に微かではあるが確かに聞こえた。慌てて声のするほうに駆け寄る。

まず、目に飛び込んできたのは 紙のように白くなった少年の顔。ただ、首から下は完全に無くなっていた。首だけになりながらも、まだ微かに息がある。それも時間の問題だ。少年の命の火はもはや消えかかっていた。

（困ったな）

ぼりぼりと頭を掻く。見てしまった以上、放置してもおけまい。狐は、ふつと筒に強く息を吹き込む。火種が宙を舞い、それを器用に前足でもみ消した。そして、キセルを腰に戻すと、少年の首を啜えて一直線にどこかへと走り去っていった。

穏やかな風景、穏やかな月の光。
ただ、天は狐に緩々とした時間を楽しむ暇を与えてはくれないようだ。

双子の月が、主のいなくなった丘を照らしていた。

一・「同じような同じじゃない始まり」(三)

常世筆 万物を創生せし業物なり。

一度これを振るえば、荒地に花が芽吹き、乾く大地に水進る。

常の名を背負いし者のみが振う資格を有す。創世において使うものなり。

其の形、縊れある瓢箪に似る。口元に枝刺さりて赤き花が咲くを「常世筆」と言い

蒼き花咲くを「常眠筆」と言う。それを以って生死の双極を現す。墨は持ち主の性質を喰らい色づくものなり。

努々気をつける事あり。

後世に己が私欲によりこれで干涉する事を禁ずる。

理に沿わぬ行いを振う者、常大神に烙を刻まれ、荒御霊と生りて禍神へと墮つる。

吐く息は臭気凄まじき事、筆舌に尽くしがたし。闇を住処とす。

常に腹が満つる事無き、其の声、常に猛々し。

努々お気をつけあれ、努々、お気をつけあれ。

そそり立つ丘。

その上に、狐は座っていた。気づけば、月は一番高いところまで昇り切っている。

七夜の双子月。

淡い白光が辺りを優しく照らしていた。

「無粋な夜だったねえ」

楽しみにしていたこの月見を邪魔された事を思い出す。
ちよいと眉をひそめて、狐は小さく呟いた。

「しかし……」

小さい手で顎を擦りながら、先程の出来事をぼんやりと思い出す。

キヨム 抑えきれない欲望を自分の創った世界に向けた為に、
常大神の怒りに触れ、禍神へ堕ちた者……。

狐が知るのは、それだけだ。

彼がどんな欲望を持つて罪を犯したのか。

そして、禍神となった今も何故、自由に動き回れるのか。

その辺りは、同じ神の名を戴く狐にも分からない。

（オヤジは何も言わなかったしな）

オヤジとは常大神の事なのだが、そう呼ぶのは狐だけだ。
当たり前の事だが、狐の本当の父では無い。

キヨムの処分が決まったあの日。

常大神が皆に告げたのは、

「キヨムを禍神に墮界させる」

という一言だけだった。

それ以外は一切語らずこの問題は終わりとなる。

それからすぐにキヨムは墮界した。

今では禁忌として誰も語りたがらない、昔の話だ。

「やれやれ……あの糞オヤジのせいでいい迷惑だ」

キセルを口でもてあそびながら、心底がっかりした声で呟く。

あの時、キヨムを墮界させるだけではなく、しっかり繋いでおけば今みたいな騒動は起こらなかったのだ。

（オヤジの庭なら誰も尋ねないからちよつどいいだろうに……）

恨み言ばかりが頭に浮かんでくる。

「さてと……」

（いつまで考えていても仕方在るまい）

狐の目がススキ野原に向けられた。

丘の上からそこを渡る風の動きがよく見える。

ススキは、風を追うように穂をうねり、幾重にも重なりながら波状に走っていく。

狐の目がそれを追っていた。

しばし考え込むように、狐の視線があちらこちらに動いた。

その足元には、先程の首が転がっていた。

「・」同じような同じじゃない始まり」(四)

「キヨムは禁を破ったもんで、あんな姿になっちまったんだ」

ぺたぺたり。

どこかで聞こえる奇妙な音。

「君は、あれを止める為に命を掛けたんだろうねえ」

ぺたぺたり。

むず痒さが全身を襲う。

「天秤を担い見守る役目を背負った以上、少しでも力になりたいんだよ」

ぺたぺたり。

それは、小さな虫が体中を這いずり回っているような感覚に似ている。

「だから……」

(この声は、誰の声なんだろう?)

ぺたぺたり。

「君は私が救う」

声が聞こえたような気がした。

取り込まれてからどれくらい経ったのか。
どうやら、僕は気絶していたようである。

瞼を開けるのが怖い。

開けたらまた、あの闇が全身を喰らい尽くそうと襲ってくるかもしれないからだ。

気絶する前になんとか幻想的な風景を見たような気もするが、あれだってどこまでが現実なのかわからない。

「悔しいな……」

やれる事は全てやったはずだ、それなのに……
後悔、挫折、失望。嫌な単語がぐるぐる回っている。
あの時、間違いなく僕は120%の力で、抗ったはずだ。

（それなのに……）

鼻の中がツンと痛んだ。目頭が熱い。

頬を伝う感覚が、余計に僕の涙腺を刺激する。拭っても拭っても止まる事は無かった。

声を上げて泣いた、悔しかった。なんだか悔しかった。

ひとしきり泣いて、そこで気が付いた。

（手？）

闇に喰われた時に、首から下は無くなっていたはずだ。

千切れて闇に溶けていくのをこの目でちゃんと見ている。
伝う涙を拭うこの手は、一体誰の……？
恐る恐る瞼を開ける。

滲む景色の中に、自分の両手のはつきりと見えた。

「あはっ……あはは……」

まだ生きていた。僕は生きていたんだ。首から下の感覚がちゃんと戻っている。

安堵した途端、笑いがこみ上げてきた。

なんだか可笑しくて堪らない。

濁っていた視界が、徐々に透明度を増していく。

青臭い匂いを乗せた風が鼻をくすぐった。

僕は光の中に居た。

「ここは……」

金色の海原の中でうつぷしていた。

土の冷たさが疲れた体にやんわりと染み込んでくる。

風に揺られて涼しげな音を奏でるススキの音が、耳に心地よい。

土の力を借りて植物は芽吹き、芽吹いたものの根に抱かれて、大地は風化する事を防ぐ。

染み出す水を飲み、陽の光を全身に受ける事によって、手を伸ばし、葉を広げ、植物は大きく成長し、

それによって大地は陽の光から、その身を乾燥からまぬがれる――
どちらが欠けても成り立たない自然の方程式。

どこかで読んだそんな一文が、頭を掠めた。

そして、恩恵に預かりながら、やがて実をつけ、母なる大地に次の命を産み落とすのだ。

（自然って偉大だな）

弱った身を大地に預け、僕はまどろんでいた。

思考する事で徐々に覚醒する脳みそが、次の情報を求めて動きだす。ごろりと寝返りを打った。空が高い。夜空がなんだか嬉しかった。何も無い闇とは違う。そこには、はっきりとした命の流れがある。

「!」

僕は確信した。

空に輝く月。

ただ、それは僕が知っている月では無い。

（あれは夢じゃ無かった!!）

そう、あの時見た　双子の月だったんだ。

一・「同じような同じじゃない始まり」(四)(後書き)

大婆様の初盆という事で実家に帰省していた為、執筆が遅れました。ごめんなさい。

楽しみにしていただいていた方々には、大変ご迷惑をおかけしました。

これからも、「狐と僕」ゆるやかに楽しんでいただければと思います。

一・「同じような同じじゃない始まり」(五)

空に、満ちた月が浮かんでいる。ただそれは、少年の知るどの月とも違う。

眩いばかりの光を放出しながら、ぽつかりと浮ぶ巨大な白い月であった

それも一つでは無い、二つ、である。

その豊饒な光を浴びて、金色に輝くススキ野原が広がる。時折吹く風で、海原を駆け渡る波のようにうねりをあげていた。

それに続いて穂擦れの音が、そこかしこで声をあげる。聴衆の歓声を思わせた。

突如舞い込んだ珍客を、歓迎しているようでもあった。

その中で、少年が一人佇んでいた。顔をやや上に上げ、先ほどから微動だにせずじっと一点を見つめている。

視線の先に丘が見えた。まるで、お辞儀をするかのようにそびえ立つ巨大な丘だ。

先ほどから、少年の瞳は、そこに注がれている。

もうかなりの時間が経つというのに、少年は飽きもせずその風景を眺めていた。

なだらかに見える丘のあちこちも、よく見れば無骨な岩がいくつも転がっている。

何百年かかってそこに居場所を定めたのだろうか？その岩肌にびっしり苔が張り付いていた。

その瑞々しい程の碧の中に、白や桃色の彩りが添えられていた。

岩の隙間に群生する名も無き花たちだ。時折吹く風に、その身を任せ揺れている。

強さと弱さが共存した、なんとも不思議な光景だった。

「きれいだな」

正直な感想が口からついて出る。

白く大きな双子の月に、瑞々しい碧を湛えた丘。

その下で金色のススキ野原が涼しげな歌声をあげているのだ。

絶景だった。

もう少し近くで見ようと、少年が歩を進めた。

近くまで寄って見れば、また何か違う発見があるかもしれない。

そのときだった。

「やっとお目覚めかね？」

土鈴のように軽やかな声が響いた。さして、声を張っている様子も無い。

それなのに、その声はよく通った。

「！！」

声の出所を探るように、少年の視線があちこちへ動く。

緊張で、顔が強張っていた。

注意深く神経を尖らせる。が、声の主は、どこにも見当たらなかった。

「どこを見てるんだい？」

また声がした。今度ははつきりと分かる。後ろだ。
一気に後ずさりながら後ろを振り返る。誰もいない。
恐怖で、少年の身が小さく竦んだ。

どこだ？どこにいる。

「やれやれ、君は面白いねえ……もっと下だよ、下」

少年は、恐る恐る視線を足元へ落とす。

「……？」

視線と視線が交差した。

蒼い瞳が、少年をじっと見つめている。

「きつ、狐？」

白い毛並み、つんと尖った耳と口。大きくてふさふさした尻尾が、ぱたぱたと揺れている。

そう、そこに居るのは、紛れもなく狐だった。
ちょこんとこちらへ顔を向け座っている。

「やあ、元気そうだなによりだ」

親しげな口調でそれだけ言うと、狐はすたすたと少年の横をすり抜けて歩き出した。

まるで、ついてこいとも言わんばかりに。

「ちよっ、ちよっ、ちよっ……」

「ん？」

慌てて呼び止める少年に、狐は振り返った。口元に小さな微笑みを浮かべて。

「ここはどこなのさ？君は一体何者で、僕は一体どうなったんだよ？」

早口に一気にまくし立てた。

そうだ、今の状況を少しでも説明できるのは、この狐以外にいないのだ。

あの闇からどう脱出したのか、なぜ僕はここにいるのか、そして、ここはどこなのか……。

なぜ、こいつが人の言葉を喋っているのかという点はこの際どうでもいい。

今はとにかく少しでも情報が欲しかった。

「まあ、言いたい事はよくわかるが」

狐は少年をじっと見つめたままそう呟くと、ちよいと空を仰いだ。

そして、納得した顔で、

「それは月を眺めながらにでもしようじゃないか」

自分勝手にそれだけ言うと、次の少年の言葉も聞かず、狐はまた、すたすたと歩き始めたのだった。

二・「小さな冒険と小さな冒険者」(一)

「おらおらっ、どいたどいたあゝ!!」

威勢の良い掛け声が響いた。土埃と地を噛む車輪の鈍い音がそれに続く。

勢いのついた車輪が道端に転がる小石を拾ってがしゃがしゃと荷台を揺らし、あふれんばかりの干し魚がその上で跳ねていた。

行商人だろうか？赤銅色に焼けているところを見ると、地元の漁師かもしれない。

逞しく隆起した両腕で絶妙なバランスを保ちながら、勢いを殺す事なく坂を下っている。

「あらよつと、ごめんよおお！」

手馴れた感じで、行き交う人の間を縫うように荷台が踊る。慌てて端に寄り罵声を上げる者、悲鳴を上げ硬直してしまう者。

人と物が交差し、色々な声が飛び交う。街道は、活気に溢れていた。

「すごいなあ」

そんな街道脇の岩の上に、一人の少年が座っていた。

ちよこんとあぐらをかいてそんな光景を楽しそうに眺めている。

真っ黒な髪が鼻の下辺りまで伸びていた。年は12〜3歳くらいだろう。

女子のように華奢な体つきをしていた。白磁のように白い肌が、この辺りの人間では無い事を証明している。

眼下には、蒼い大海原が広がっていた。靄がかかっているのはつきりとは分からないが、小さく島らしきものも見える。その手前。

港町セベク　フォレイ族が統治する人口3000人程の軍港都市だ。

そこから下　南に下る半島全てが「森の民」フォレイ族領となる。その為、セベクを中心に東西へ向かって巨大な壁がどこまでも伸びていた。多分半島の端まで続いているのだろう。

堅牢な壁は、全ての侵入者を許さないとばかりに、悠然とそびえ立っていた。

俗に言う国境である。セベクは「砂の民」と呼ばれるガンダル族が統治する島へ行ける唯一の入り口でもあるのだ。

全ての種族に対して、中立を保つフォレイ族だからこそ出来るのかもしれない。

故に、セベクは三国国境中立都市として、比較的治安も安定していると少年は聞いていた。

「やれやれ、やっと終わりが見えてきたなあ」

やれやれと言った割に、少年の顔に困った表情一つ浮かんではいない。

むしろ、わくわくしているように見える。

新しい物に触れる子供のような無邪気な笑顔を浮かべていた。いい笑顔だ。見るものをほっとさせる、そんな笑みであった。

「さてと、一気に抜けちゃうか」

少年はそう言うと、岩からひょいと飛び降りた。そのまま軽やかに地面に降り立つ。ふわりと旋風が舞った。

鳥が舞い降りるかのように軽い身のこなした。そのまま、首だけで
辺りを軽く見回す。

大丈夫、荷台は来ていない。
ゆつくりと歩き始める。

目指す街まで、後、少しだった。

二、裏「それぞれの旅立ち」

滑り降りていく。

冷たさを湛えたまま　あるべきものをあるべきところに還す。

丁寧、丁寧に。

時の止まった月夜の世界、運命の輪が微かに回り始めた。

それは、静かな流れ。草木ですら、変化に気がつかない　その程度のものだ。

ただ、5周7夜の白光が、神秘を灯したのは事実だった。

15周に一度しかない奇跡。白き光の中で、その身は一度だけ復活する。

再生、復活、輪廻転生。

以前は助ける事が出来なかった。

あれは、いつの約束だったのだろう。確かに助けると約束し　果たす事は無かった。　果

寄ってしまった縁なのか。

寄せてしまった縁なのか。

いやいや、こちらがわざわざ呼びつけてしまったのかもしれない。

救えなかった過去の自分と決別する為。人を救う事で、己をも救うという自己欺瞞。

嗚呼、なんとも言うがよい。

どんな罰がこの身を貫こうとも後悔はせぬ。

私は助けたい。

目を瞑り、ずっと避けてきた過ちを、繰り返さぬように。
二度と　見捨てたりはしない。

「お使いに言ってくれないかな？」

そそり立つ丘。

月を見上げながら、狐は少年にそう告げた。

「なーに、簡単なお使いだよ。2、3日で終わるだろうから、ついでに街を見てくるといい」

楽しそうにそう呟いて、銀の筒から、ぷかりと桜色の煙を吐き出したのであった。

すたすたと狐は歩く。

金色の海を掻き分けるように　ただ黙って歩いていく。

その蒼の双眸は、真っ直ぐ天へ向けられていた。

その表情にいつもの飄々としたものは無い。何かと必死に戦っているようにも見えた。

「夜神、肝心な事になると」何も伝えない」のだな」

不意に響く声。

それに答えず、狐はただ、じつと虚空の彼方へ眼を向けた。

蒼の双眸の先にそそり立つ丘がちょこんとお辞儀をして立っている。

「やれやれ」

「君はこの結末をある程度聞いていたのだろうか？」

丘の上に、男が一人。

さらりとした黒い水干を羽織った細身の男だ。

癖の無い金の髪が、月の光に透けてさらさらとなびいていた。

その瞳は、紅い　　まるで、夕日に染まる山々のように赤々と輝いていた。

その双眸がじつと狐を見返す。

その声の響きにはどこか悲しみの音色が混じっていた。

「陽神　　君もその結末に乗るつもりかい？」

狐は、黙って銀の筒を咥えた。

「シオンの予見　　残念ながら崩す事は出来無いようだしな」

「常時神の予見は絶対だからな。アスラオ」

アスラオの姿が、ふっとその場からかき消すように消える。

「昔の名で呼んでくれるとは嬉しいよ、ハクコ」

華のような笑みを浮かべたまま、陽神こと、アスラオが狐の銀の筒に手をかざす。

紫色の焰がぼつと灯った。

「先代が亡くなってもうどれくらい経つのかねえ」

しみじみと呟きながら、桜色の煙を吐き出す狐。
その声音に、昔を懐かしむような暖かさは無い。

ススキがぴしぴしと悲鳴を上げる。
内包する険しさがその逃げ場を求めて外へ漏れ出しているようだった。

「やっぱり君は行くんだね」

アスラオはじつと空へ眼を向ける。

「嗚呼、もう逃げないと決めたから」

小さく、硬い決意がこもった声がそれに呼応する。
その瞳が、悲しげに潤んでいた。

「関わりすぎた　かい？」

アスラオの声が優しく響く。

「3年は長く　それでも楽しかったんだよね」

月の光で、狐の頬がきらりと輝くのを、アスラオは見た。

二 裏「それぞれの旅立ち」（後書き）

更新が贈れていて申し訳ありません。

色々な事態があつたとはいえ、楽しみにされていた読者様を裏切るような形となっている今の状態を深くお詫び申し上げます。 筆者

二・「小さな冒険と小さな冒険者」(二)

今宵も月が綺麗だな。

すたすたと狐は歩く。

金色の海を掻き分けるように

ただ黙って歩いていく。

僕はその後についていくだけ。

「……」

「……」

さつきからお互い、一言も言葉を交わしていない。

時折吹く風に押されて頭を揺らす穂の音が、しやらしやらと響いてるばかりだ。

軽やかな足取りで、狐は丘を登っていく。

見ると実際に登るとではまったく違う丘。

遠目に滑らかに見えていただけで、ごつごつとした岩や、侵食による為であろう亀裂に阻まれ、

なかなか先に進む事が出来ない。足が竦む。何度も何度も立ち止まった。

気を抜けば下までまっさかさまに滑り落ちるだろう。

月が歪んで見えた。くそつ、負けてたまるか。

何とか歯を食いしばって狐の後を追って歩く。

どれくらい登ったのだろう。

狐がちらりと振り返ると、僕が足を止めたのは、ほぼ同時だった。

気が付けば、険しい岩々は消えた。足元は柔らかな草に包まれている。

どうやらここが頂上らしい。

空を見上げると、両手で抱えきれないほどの大きな月が天空に輝いていた。

「疲れたかい？」

「うっん……、ここが終点なんだね」

狐がこくりと頷く。その口元に微笑みを浮かべて。

月光を背に受けてきらきらと輝いていた。見つめ返す瞳が、蒼い。深海を思わせる深い蒼。

つられてふにやりと景色が緩んだ。

過度の緊張と高所で、頭がくらくらする。

僕はその場にへたりこんだ。

そんな事をさして意を介さず、僕に背を向けたまま、狐は月を見上げている。

そして、静かな声で、

「改めて……初めまして、だね。私の名は、ヤコ。

夜を統べる神で、このススキ野原の管理人ってところかな？」

首だけをこっちに向け、にやりと笑った。

「夜の……神？」

「そそつ、まあ、神様って言ってもこの夜空を掃除するしかない掃除夫みたいなもんだけどね」

小さな手で、ぽりぽりと頭を掻きながら、懷に手を入れた。

「それは？」

狐の手に、銀色の筒が握られていた。真中に小さな穴が空いている。僕が訝しげに筒を指差すと、狐はぱくつと筒を啜えて

「煙管キセルだよ。こうやって……」

その左手から蒼白い炎が出現する。

「!?!」

狐はとても慣れた手つきで銀の筒にそれをかざす。桜色の甘ったるい煙が、もやあと揺らめいた。

「手っ、手から炎が……」

狐は、驚く僕を不思議そうな顔で見つめると、

「君は…やはり面白い…だな」

うーっと唸っている僕を一瞥して、なんだか妙な文法でぽつりと呟いた。

「さて、何から話したらいいものかねえ」

月を見上げたまま、そう続ける。

桜色の煙がぷかぷかと輪を描いていくつも宙に浮かんだ。

空に浮かぶ月は双子月。

目の前には煙管を咥えて人語を話す狐。

全てが僕の常識を超えている。

聞きたい事が多すぎて何から話したらいいかわからないだけなんだけどね。

僕は黙って地面に座ったまま、次の台詞を探していた。

「なんで虚無に喰われた？」

狐は突然呟いた。

その表情は、とても真剣だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7346a/>

狐と僕

2010年10月22日00時22分発行